

第一〇章 人物

第一節 森田草平

一、森田草平

草平の少年時代 森田草平は明治一四年（一八八一）三月二日（自筆年譜では一九日）、方県郡鷺山村七〇番戸（のちに稲葉郡、現在の岐阜市鷺山）に森田亀松・とくの長男として生まれた。本名米松。生家は「草分名主と云われるような大庄屋でなかったばかりでなく、世襲でもなかった」が、「村の庄屋」であり、父亀松は菩提寺の門を寄進するほどの名望家であった。明治一八年、隣村土居村の小学校に入る。開巻劈頭「凡そ地球上には五大人種あり、亜細亜人種・欧羅巴人種」というように無闇に面数の多い宛字を四〇五行ならべた読本を授けられ、辟易して間もなく退学し、明治二〇年改めて同じ小学校に入学した。明治二四年三月、岐阜市高等小学校（現在の金華小学校）に入学、五月の父死去により一〇歳にして家督を相続し、その年一〇月二八日には濃尾大震災を体験して「初めて浮世の有為転変を悟った」。

震災の模様をのちに次のように書いている。

この朝よ、大凶変の前には恒にありといふ物凄き静穩は空気を占めて、梢に微かなる戦ぎだになかりき。朝早きが農夫の常なれば、夫は既に圃に行き、妻は織り残したる機に凭りたる頃、地下に遠雷の如き響轟きて、陰風さと吹上ぐるよと見れば、坤軸二つに裂けて、立上がる土埃の中に、在りとある建物草の靡くが如く倒れぬ。

次いで大焦熱大叫喚の幕は落され、人の魂切る声、救を求むる叫び四方に起り、母を喚び子を求めて逃げまどふさま面を向く可からず。

地は絶えず波の如くに揺れたれば、足の溜る可くもあらぬを、暫しなりとも命助からんと思ふ心一つにて、僅に生残れる村人はわななく膝を踏み緊め、足弱の手を引き、負傷せし者を背負ひて、争ふて村はづれの丘の麓なる竹藪の中に避けたり。

こは此村の先祖の、そこに横れる墨々たる土饅頭の下に眠れると、一つには村の中の井といふ井は、尽く水涸れたれど此壑域の片隅なる閻伽酌む古井戸のみ、尚元の如く清水を湛へたればなり。……中略……

小学校時代は活版本の『岩見武勇伝』・『自雷也物語』や『頼蒙阿闍梨怪兇伝』を読みふけり、講談物や小説好きな少年だったが、成績は優秀であった。

上京 明治二八年高等小学校を卒業した年は、日清戦争戦勝の興奮が岐阜の寒村にも流れて、軍人を志望して単身上京し、攻玉社（海軍予備校）に入學した。軍人を志望したのは「費用少なくて仕官の途を求めむがため」であり、また「第一余り金もないし、（中略）非常なロマンチックな考え方から水雷にでもあたって、ぶかぶか死んでしまうのが一番いいという気持」でもあったという。最初の下宿先は同じ鷺山村出身の金物商平野英助の家であった。草平はこの英助の子が当時の異色女形・四代目沢村源之助と思ひこみ、感慨に耽ったが、事實は英助の父と源之助とが従兄弟の関係であるという。しかし期待して入った学校の荒々しい校風が米松には合致せず一人小説に読み耽るようになった。

休暇に帰省すると、村の作男の小倅をそのかして長良川を小舟で下り、金津遊廓の遊女に会いに行ったりした。

明治三一年攻玉社を退学し、神田の国民英語会（磯部弥一郎）に通ったが、中学卒業の資格を得るために半蔵門外にあった杉浦重剛の日本中学校五年級に編入した。翌三二年三月中学を卒業して帰郷したが、その後七月に四高に入学するまでの間に同年の従妹森田つね（本名りう、森田源八の娘、明治一四年生。『煤煙』の隅江、『輪廻』の小夜子）を知り、その恋は急速に進んだ。七月に金沢の第四高等学校一部文科に入学、九月には森田つねが後を追って同棲生活を始めたが、つねの父源八の訴えによって一月二日担任教授藤井乙男から諭旨退学を命じられた。この期に森鷗外の『水沫集』を耽読、暗誦するほどの傾倒ぶりであった。金沢を追われて約半年名古屋に滞在の後、明治三三年五月再び上京して根津権現境内にある下宿で文庫派の詩人河井醉茗を知った。文壇人を知った最初の人である。六月、第一高等学校の入学試験を受けた。

一高入学の翌明治三四年から生田星郊（のちの長江）・栗原古城・川下江村らの校友たちとともに同人回覧雑誌『夕づつ』をはじめ、翌三五年に千駄谷の新詩社に与謝野夫妻を訪ねてその知遇を受け、回覧雑誌の誌名も鉄幹から『花雲珠』の名を貰って改名した。明治三六年三月には『明星』に「犬吠崎」が二十五絃の筆名で掲載された。活字になった処女作である。

「煤煙」まで 明治三六年四月には同じ『明星』に「地震」を発表した。同じ四月には「恋の曲者」で『文芸倶楽部』の懸賞短編小説の三等に入選、七月には「仮寝姿」で一等に入選して賞金二〇円を得た。この年七月第一高等学校文科卒業、八月には長男亮一が出生、九月には東京帝国大学英文科に入学した。この年の暮転居した本郷丸山福山町四番地伊藤ハルの家が、図らずも樋口一葉の旧居であることがわかり、「ただそれだけの事で、何か自分が運命の星にでも導か

れているような気になり、自分の将来まで約束されたような気がして有頂天になった」という。この家で一葉祭が開かれ、馬場孤蝶・上田柳村、与謝野鉄幹・晶子夫妻、河井醉茗・蒲原有明・小山内薫ほかの人々が集った。

明治三七年末から三八年初の間、下宿先の伊藤ハルの娘岩田さくに会った。さくは婚家から帰って姉夫婦の家に住み踊の師匠をしながら時折母親の許に出入していたのであった。妻子がありながら、たびたび顔を合わせているうちにさくに惹かれて行く自分を、「捨てられたる女」（帝国文学第一巻六号・明三八・六）に森田米松の本名で書いている。明治三八年一月初めて漱石を千駄木町の自宅に訪ね門下生の一人になった。そのころ、馬場孤蝶・上田柳村らが計画していた『芸苑』に生田長江らとともに同人に加わり、第一号（明三九・一月刊）に「病葉」を柳村から貰った白楊の筆名で発表した。この作品に対する漱石の、きびしく懇切な批評を受けて、漱石への敬慕の念は急速に高まった。

明治三九年七月東京帝国大学卒業。卒業論文は「沙翁の先駆者クリストファー・マアロウ」であった。卒業後郷里の鷺山に、恐らくは一高卒業以来久しぶりに帰った。以前は結婚に反対であったつねの実家では、態度を変えて結婚を求めようになったが、東京にはさくがあり処置に窮した。とどのつまり、七反の畑地と一反半ばかりの田地を売却して、母とく、妻つね、長男亮一を残して再上京したが職もなく、翻訳などで乏しい生活をつづけた。草平が小木曾旭晃に初めて会ったのは、このときであったようである。

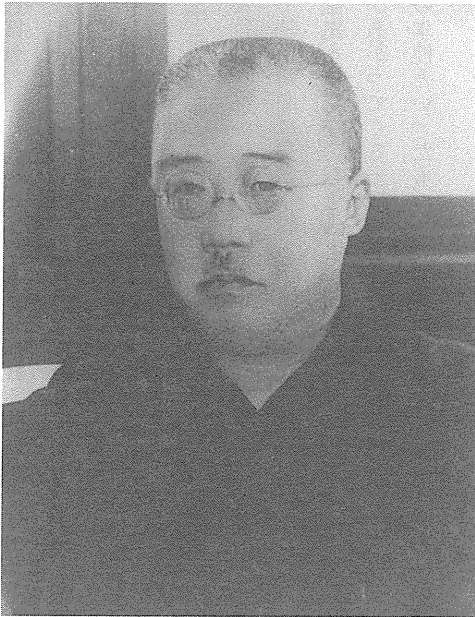
明治四〇年一月、生田長江・川下江村との三人の合著短編集『草雲雀』が漱石の助力で出版されることになり、これを機会に雅号を新たに心気一転の実を挙げようと思ひ、漱石を選んだ「緑萃」の号の下一字を二字に分けて「草平」を用いることとした。

塩原行事件と「煤煙」 明治四〇年四月から、漱石と松浦一の紹介で駒込の天台宗中学林の英語教師となり、六月に

九段中坂下の成美女学校に閨秀文学会が開設されると、晶子や長江と共に講師の一人となった。聴講生の中に平塚明子（雷鳥）がいた。夏になって、五月ころ生まれた長女夏子を連れてつねが上京してきたが、草平は快々として楽しまず、次第に紅灯緑酒にひたるようになった。そんなところへ現れたのが雷鳥であった。翌明治四一年になると急速に親密の度を加えたが、理知の女性と激情の男性の恋は遂に成らず、共に死を求めるといふ一点だけは合致して、三月二三日塩原に近い尾花峠の雪山に死場所を求めているところを捜索の警察官に保護されるという事態をひき起こした。

草平は漱石の家に二週間ほど世話になった後、四月一日牛込築土八幡前の植木屋方に移り、漱石の勧めで事件を素材とした創作生活に入り、明治四二年一月一日から五月一六日まで東京朝日新聞に「煤煙」と題して連載された。

心中未遂事件の背景ともなるべきこの郷土の場面は、あてて「煤煙出来栄ヨキ様にて重畳に候」と書き送り、完結後の小宮豊隆の批評でも「故郷の巻数章は……最も優秀なる名篇だと思った。底を流れて陰鬱な悲惨なものがある」と書いている。この小説は新聞連載中に内務省警保局からの警告もあって、春陽堂が出版を躊躇し、明治四三年二月から大正二年一月にかけて四分冊に分割して刊行される結果になった。明治四三年八月一二日



森田草平

一三日ころ、牛込矢来町に転居した。明治四四年四月二日から七月三一日まで、東京朝日新聞に「自叙伝」を連載した。この東京朝日には、明治四二年一月二五日から四四年一〇月一日まで、夏目漱石の責任による文芸欄が設けられて、草平が編集にあたり、小宮豊隆がそれを助けた。

大正二年五月ころ、森田たまと素木しづとがほぼ同時に草平のもとに入門した。

「初恋」と「十字街」 明治四四年一二月、「初恋」を『中央公論』に発表した。明治四五年三月、『中央公論』に発表した「駈落」も「初恋」と同じく郷土における恋の素朴な行動を描いている。

明治四五年六月七日から同年（大正元年）八月二八日まで読売新聞に長篇小説「十字街」を連載した。

森田草平にとって、郷里岐阜は、忌むべき血縁と不義の証拠を風景や方言とともに見せつける土地であると同時に、初恋の人や最初の妻となった人の面影の背景となって浮かびあがってくる土地でもある。否定しようとしても否定しきれず、肯定しようとするれば憎々しげに遠ざかって行く郷土の本性といったものが、前記の作品をはじめ草平の主要な作品にはひそんでいるようである。

濃尾大震災当時の鷺山の人口は六四五名で地震による圧死者は九名であった。岐阜市の震災記念堂にある『震災死亡人台帳』に、「明治一三年一月一八日生 森田すみ長男 森田円治郎」とあるのが、小説のなかの円ちゃんであるのだろう。

大正五年一二月九日、夏目漱石の死に逢い、「自分は永遠の弟子である、一生師匠にはなれない人間だといふやうな気が頻りにしている」という感懐をもつ。小島信夫はこの語を軸として、草平のなかにある岐阜人の特性をえぐりだした。

大正八年、次男が生まれ長良と名づける。翌九年、法政大学の教授になる。

『輪廻』 大正一二年、一〇年ぶりの長篇小説「輪廻」を雑誌『女性』の九月号から連載し、大正一五年一月、新潮社から出版。

草平の長篇小説のうち『煤煙』は冒頭の六章が岐阜を舞台とし、岐阜弁が描かれているに過ぎないが、『輪廻』は全篇が岐阜を舞台に展開している。郷土への愛着が必ずしも強くなく、むしろ呪いたいほど厭わしいと、小木曾旭晃に洩らしている草平の心境のなかには、愛憎相反の心理が微妙に作用していたのかもしれない。その一例を示すものとして、草平文学における方言の意味といったものも考える必要がある。

こうして草平が郷土に対して必ずしも好感を持たなかったにもかかわらず、くり返し郷土を素材としたのは好悪に流される安易さで郷土を捨てきれなかったためであり、近代的な生活感覚と郷土との深い因縁とをはかりにかけた証左でもある。

そして、そのような深みから草平における岐阜弁の描写が生まれたので、方言文学の重要な一つの型をここに見出し、ていよいのである。

都会人と共に方言を口にする郷土人を作中に登場させ、その間に自分の生き方を探っていくこうとする草平的な態度、そこにはよかれ、あしかれ、日本の近代人の宿命にまともにもぶつかる誠実さを見出さなければならぬ。

『輪廻』以後の草平は、翻訳と漱石研究のほかは主として歴史小説を執筆している。「道三の死」「信長の死」「光秀の死と秀吉」「細川ガラシャ夫人」(未完)などには、郷土との地縁がひそんでいるように想われる。

細川忠興夫人及び天正時代の資料調査のために昭和一三年(一九三八)以来通いつづけた帝大史料編纂所の疎開と一

緒に、昭和二〇年六月、長野県下伊那郡へ疎開、昭和二四年一月二四日同地で逝去、享年六九歳。昭和三七年六月一日には文学碑が建立された。文学碑及び著書・遺品などを納めた草平文学記念館は、出身地の岐阜市鷺山三丁目に在る。

(岐阜市史)

第二節 昭隱会聰禪師

幼時 昭隱禪師は、正木の人で川島仁三郎の三男として、慶応元年（一八六五）七月二四日に生まれた。幼名を捨次郎といい、生まれつきひ弱であったため、八方の医療機関や祈禱治療の各所を巡って手を尽くしたが効果がなかった。ある日、観相（人相見）に将来を占ってもらったところ、出家しなければ、生命を全うすることができないと断じられた。

ちょうど六歳ごろになると、遊びの中でも高座を設けてこれに上り、附近の子ども達に説法の真似をして遊ぶという、僧侶としての天稟の兆が見えたという。そこで八歳になるのをまわって、檀那寺の真宗大谷派慶善寺（岐阜市六条一二六）において文字を学ばせ、小学制が布かれると同時にこれに移った。小学校に移ってからの勉学は、当時の学友の中でも抜群の成績であった。

少年時代 一一歳になると、父は村の心洞寺（正木一五一七ノ一）に詣り、捨次郎を卓洲和尚に願って剃髪させ僧門に入らせた。

ところが、卓洲和尚には既に他人の弟子があった。当時の心洞寺では、寺産（寺の財産）が必ずしも裕富でなかったため、和尚は岐阜の開善院（岐阜市寺町）につれて行き院主則門和尚に謁して弟子入りを願い、捨次郎は改めて則門

の弟子となった。

昭隱禪師が則門の弟子となった当時の開善院は、四百年に及ぶ荒廃からの復興の途上であって、その日々の労務の厳しさと、食事の粗悪さは、元来虚弱だった師にはとても耐えられるものではなかった。そのため師はひそかに寺を抜け出して我が家へ逃げ帰ったが、母は師を戒め、これが即ち頭陀の行（托鉢の行）なのだということをおもむろに諭し、且つ故意に寺院以上の粗悪な食事をつくって与え、「我が家の食事も寺院のそれと変わるものではない」と示し、帰院させたこともあったという。

その後の師は、それ等の辛苦に耐えて修業に励み、明治一二年（一八七九）の春には、旧加納藩土三宅椀台の門に入り、日々通って経史を学び、また瑞龍寺（岐阜市寺町）の講日には必ず出席し、殊に法儀の学習を好んでこれを記憶した。かくしてその年の一月八日、改めて則門和尚によって得度（出家して僧となる）した。

その日、則門和尚と交誼のあった佐野栄昌院の南隱和尚が来泊され、師のために字を昭隱、諱を会聰と撰名して与えた。

師は一四歳になると聯芳学林に入って、万友和尚の教を受けて学業に励んだ。学業は日に進み、同学林でも師が稀にみる優秀な成績であることを認めて庇護につとめたが、元来のひ弱さが因で病魔によく悩まされ、常に薬石を手ばなすことができなかった。

師はある時「こうして、学林にあって学ぶことだけをしていたのでは、いよいよ病を増長させるばかりである。私は寺院にもどるべきである。寺に帰って死んだとしても本望である。」と、学業を廃して開善院に帰った。

丁度そのころ、師の叔父某が危篤との報があったので、師はその叔父を見舞った。臨終に瀕した叔父は、師の手を把と

て、
 「我は今、眼光落地せんとしている。正に斯る時に当たって汝は如何にして我をして生死を脱得せしめんとするか。」
 と、問われた。

「私は今、死んでいこうとしている。こんなときになってお前は、どのようにして私を生死の苦しみから逃れさせてくれるのか。」と僧侶になるための修業中の師に問われたのであるが、師もこれには答えることができなかった。

青年時代の修業 このことがあってからの師は、大誓願が激しく燃えあがり、寺に居たたまれなくなって、奮然として密かに寺を出て、中山道をたどって鵜沼に到り、その夜を野口家に宿を求めた。

野口家は、師が先に経文を教わった三宅椀台と親戚の關係にあり、正眼寺(美濃加茂市伊深町八七二)の信徒であったことから、翌朝その紹介で正眼寺に登り、掛塔を請う(とどまることを請う)て、泰竜老師の元で修業することになる。

ところが泰竜老師がしばらくして病床に臥し、大義老師に代わった。その時、師は一六歳であったが、この年の臘八接心(釈迦が悟を開かれた日)において大事を發明するという思いがけない素晴しさを發揮されたので、大義老師も驚かれて「底しれない賢さを見る」と賞讃された。

これ以来、元来の虚弱さからようやく健康を取りもどし、制問(定められた学問の日)の開善寺に帰るごと、また瑞龍僧堂に洛参(問い尋ねる)する苦しい修行に耐える体力を持つまでに至った。

禅僧昭隠 このころ既に、師は俗人のように心迷うことない修行した禅僧の質を備えていたが、或る日大義老師が禅外和尚を訪ね話し合ううち、たまたま師のことに及び、禅外和尚が「この公案を授けるのはまだ早いのではないか」といったのに対して、大義老師は「法を授けるのに歳の長短はない」と答えたという。

このようであつたから、抜擢されて正眼寺の頭首（修行僧の長）となつた。或る日、同僚が集まつた席で、一人の僧が末期の句意（人の死また死後のこと）に論じ至つて、同僚の僧を顧みない傍若無人の態度であつたのを見て、師は眼を怒らせて立ち上ると拳を揮つて彼を打ち、その無分別をたしなめた。そのことがあつてからは、集まる総ての僧侶や人々から畏敬されるようになったという。

明治二四年（一八九一）の秋、大義老師に仕えて名古屋の徳源寺（東区新出来町二ノ七一）に滞在中、濃尾大震災が起きた。師は老師の許しを得て開善院の則門和尚を見舞うと、堂の建物は倒壊して無惨な姿であつた。

そこで師は兄弟の協力を得て後始末をし、更に別に則門和尚の居室を造営して正眼寺に歸つた。

その頃、清泰寺（美濃市美濃町一四三九ノ一）の猷宗和尚が年老いたので、寺の後継者を求めて、旧友であつた則門和尚にはかり、師を清泰寺の住職に迎えた。

清泰寺の住職についたのは明治二六年（一八九三）一〇月で師二九歳の時であつた。住職となつてからも、師は往復六里（約二四竈）の道を歩いて正眼寺への通参を怠らなかつた。

明けて二七年（一八九四）二月に大義老師が亡くなられ、その後を洞宗老師が継承されると、師は従来から関係のあつた瑞龍寺の禅外和尚の室に通参した。

清泰寺を夜中に起き出て、ようやく夜の明ける頃に着く瑞龍寺まで片道七里（約二八竈）を、晴雨風雪もいとわず一年有余の期間通参して修行に励んだ。

しかし、三一年（一八九八）の夏に禅外和尚も亡くなられたので、天龍（京都市右京区嵯峨天竜町の天竜寺）の爐鞴裏の蛾山禅師に師事せんと、京に入つて禅師の指導を受けて修行に励んだ。禅師は痛烈な鉗錘かぎづいを下し、些いささかの假借かじやく（容赦ようしや）

がなかった。この苦修三年をよく耐えたが、ここでも峨山禪師の死にあつて、清泰寺に帰つた。

明治三五年（一九〇二）の秋、更に泉州の南宗寺

（堺市南旅籠町東三ノ一）蜻州和尚の元に出かけ、

ここで四年間、蘊奥を究尽（奥義を究め尽くす）して、三九年（一九〇六）の解制（きまりの解ける）

の日、蜻州和尚から、

昭隱和尚、初參霧隱大義師十餘年、後住清泰、時

扣滴翠禪外之室、又触息耕峨山之辣手殆三年、末後

来我膝下、辛參苦修、遂尽其蘊奥、自今我宗大興焉、自信自重、以覆蔭後昆、至囑々々

と、印可を受けた。

これより先三七年（一九〇四）一二月に、清泰寺の任職を乾嶺宝公にまかせて蜻州和尚の南宗寺で修行していたので、

印可後は京都の妙心寺の花園大法院に在つて、聖胎を長養（悟りを開いたのち更に悟りを深める修行）につとめた。その後、京都の大応寺（京都市左京区堀川通り寺の内上ル二東入扇町七三二）に寓し（かりずまい）、ついで鴨沂妙音堂に

移り、相国寺（左京区今出川通烏丸入相国寺門前町七ノ一）の東嶽和尚に更に教えを求めて、修行に打ち込んだ。

大徳寺住職 こうして、師が東嶽和尚について修行しながら妙音堂に在つた折、大徳寺（京都市西区紫野大徳寺町五

三）の広州和尚が病氣になつたので、後嗣を求めて交誼のあつた東嶽和尚・蜻州和尚にはかつたところ、兩師は、師を

妙祐居士と接し誓了す初三下

目と不在す直、弟言テ匡ル様ノ礼部村名

ト主人ノ名借テカスル人々中無礼ノコテ編をテ

ヨイカラ先方ノ地名ト姓名借母年トテ折区し御直

社下セバ寺甚銀達坊時ノ腹がこト妙耶た允由

厚謝礼事ト、カク

正木・川島捨次郎宛
明治41年10月の昭隱の葉書



昭隠会聴（川島渡氏提供）

竜宝山大徳寺僧堂に法幢を掲げた。（法幢は仏号を書いた筒状の絹布の幟）

ここに於て、師の名声が一時に高まり、朝野の人々が門下に集まり、師の教を請うたのである。

近衛文磨・前田利為・細川護立等の一族家従が師の室に参じ、また師を東京の私邸に請じて、教を受け、殊に有栖川宮には師を召されている。いろいろ諮問し、話を聞くなど、師の名声は一世を風靡した。

明治四二年（一九〇九）四月、妙心寺（京都市左京区花園妙心寺町一）開山大師の五五〇年の大遠忌には、全国二五道場の五百に及ぶ僧侶が参集し、全国幾十万の参詣が境内を埋めつくし、妙心寺開山以来空前の大盛事となった。

薦めたので、広州和尚は使を開善院に遣して、師を住職として要請したが、開善の則門和尚は「まだ小物である。大徳寺の住職として、大衆の前に臨むことは無理である」と言い放って、承諾を与えなかった。しかし、大勢の先輩や後輩たちの切なる推せんもあったので、漸く承諾を与えた。

そこで広州和尚は一切を師に托し、明治四〇年（一九〇七）八月示寂された。よって師は九月一七日、聚光院に移り、

この日昭隠老師は、特に篤き法縁をもってこの法要に列席、大徳寺派の代表として、無相大師の真前に回向した。師はこの一大因縁の時機に、改めて常昭寺の魯山和尚について、仏教上のいましめの伝受を受けた。

明治四四年（一九一〇）碧巖録を開巻し、翌大正元年三月、前田候爵家の要請に応じ、碧巖集会を開いたが、この講座は十余年も継続され、大正一二年（一九二三）三月一六日を以って第八八則玄沙三種病人則を収巻した。年々各則に亘って説き来たった内容を懇切丁寧に説得されたので、聴講するものは当時の一流の人達であったという。

こうした間にも、

大正二年（一九一三）息耕録を開講。

大正三年（一九一四）大徳禅堂を開講。

大正四年（一九一五）虚堂録代語を開講。

大正五年（一九一六）濃州下牧金竜寺授戒会に四二章経を開

講。同年雪安居には自堂に槐安国語を開講。

大正六年（一九一七）四月福井大安寺授戒会に大愚宗築和尚

このように、日々が教化の日常であった。

正眼寺住職 この年（大正七年）正眼寺の洞宗老師の後嗣問題で、宗派内がゆれることがあったが、熊嶽老師の移幢によって漸く落付いた。

熊嶽老師正眼移幢の一春、四月一二日正眼僧堂のために昭隠老師は亀鑑を投与して、佛の教えと僧侶としての修行の必要及び在り方、僧侶の使命を激励として与えた。

このことがあって、正眼の後嗣にかかる騒然たる風聞がおさまったと伝えられる。

大正八年（一九一九）熊嶽老師在任一年たらずして示寂。二月二四日妙心管長の畠川和尚から昭隱老師は正眼寺住職を拜命する。妙心再住位に進む。

正眼寺第一二二世・僧堂第六世を嗣いだ師は、槐安軒を改めて霧隱軒と号し、五月から臨濟録を開講、無尽燈論を開卷、講了して五祖録を開講。一〇年には大應録と毒語心経を開講。一一年槐安国語録の開卷。一二年前田候宅の一二年に亘る碧巖集の講注を収卷し、尚同宅で佛項録を講じた。

この間、各地の同派寺院の授戒会・奉讃会・遠忌・齋会と幾多の要請に応じて、広く布教に務めた。

ところが、一二年の冬、伊自良東光寺の授戒会から帰山された師は、身体の不調が現れ、その後半ば病床に在ったが、病を冒し槐安国語録を講じられ、室内での参禅も休まれなかつた。

大正一三年（一九二四）時恰も本山管長の任期満了により改選期であつた。二月一〇日与望の帰するところ師が当選され、廬山管長より請状が届いた。

しかし、病床の身ではと、懇ろに辞して任につかなかつたが、二三日朝、使者の役位が入室すると茶礼をもってこれを迎え、自分も茶を点じさせてこれを喫して眠り、翌二四日午前一一時、紙を命じて「槐安国裏 六十余年 末後一句 罪犯彌天」と書し、筆を投ずると共に示寂した。

師は幼少時にひ弱で病氣勝ちであつたことから、成人しても身体は寧ろ短小であつたが、生まれつきの意志の固さ不撓不屈の情熱は優れて雄々しく、眼光は人を射す鋭さがあつたが、その奥に温かさがあり、人を教え導く慈眼の輝きがあつたという、恩威を兼備する大師家であつた。

（妙法山正眼禪寺誌）

第三節 川島 淺 衛

川島先生頌德碑・碑文 川島淺衛先生ハ明治一九年五月稲葉郡鷺山村下土居ニ生ル、資性温厚篤實ニシテ勤学ノ志厚ク、夙ニ教育界ニ入りテ、初メ常磐小学校ニ教鞭ヲ執リシカ、明治四三年七月居村鷺山小学校ノ訓導トナリ後校長に任セラレ、拮据精勵二〇有余年専ラ児童ノ訓育青年ノ指導ニ心血ヲ注キ、殊ニ劣等児童特別教育方法ヲ研究シテ好成績ヲ挙げ、大正一二年紀元節ノ佳辰ニ方リ本県ヨリ奨勵金ヲ授与セラレ、尋テ昭和九年九月勲功ニ依リ勲八等ニ叙セラレ瑞宝章ヲ賜ハリ、一〇月三日後進ニ道ヲ讓リテ職ヲ退ク、其ノ間先生ノ薰陶ヲ受ケン者實ニ一千有余名、各其ノ器ニ隨ヒ有用ノ材タラシム勞効著ニシテ真ニ教育者ノ典型タル、頃者郷黨ノ子弟等先生ノ恩誼ヲ偲ヒ相謀リテ碑ヲ建テ其ノ功德ヲ不朽ニ傳ヘントシ文ヲ余ニ請フ、此ノ師ニシテ此ノ弟子有リト謂フヘシ、感謝歎ノ餘聊カ其ノ梗概ヲ録スト云爾

昭和一〇年一月

岐阜県知事

正五位勲四等 坂千秋題額

徳彰功表



頌 徳 碑

第四節 細味菴桑原藤蔵

鷺山村で生まれた桑原藤蔵は岐阜の美江寺に束あて洗い張りはりで生活したが、書にすぐれ、俳諧はいかいも巧たくみで評判が高く、塾を開いて生徒を指導していた。

ところが伊勢国の村瀬樗良が俳句の評判を聞いて遊歴の旅で細味菴を訪ねてきた。その折、樗良は「俳諧は庶民の文芸としてはむつかしい。いって五七でつづれる狂俳を普及したら」と奨すすめた。

そこで藤蔵も考えを改めて狂俳をひろめようとした。かくて細味菴第一世の大人となり狂俳の始祖となった。後年、細字を得意とし、扇面に千字を認めて世人を驚歎させた。文政六年（一八二三）四月一二日、七五歳で病死した。

藤蔵は無欲澹泊で、生涯結婚しなかった。従って子孫は無く一代で絶家してしまった。現在、美江寺町の観昌院内（美江寺境内）に碑石があり、表面に

一舟の人並び行く枯野かな

と辞世の句が刻んである。法名は猫歩俊才居士である。

藤蔵が細味菴第一世として有名であった時、その門に入り、細味菴を継いで第二世となったのは里仙である。里仙は美江寺町の庄屋であったが、天明四年（一七八四）に生まれ嘉永一年（一八四八）六五歳で病死した。

第一〇章 人 物

身ひとつを木枯こがらしまたと枯れにけり
が辞世である。